
ユウウツ

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コウウツ

【Zコード】

N8152X

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

芥川賞作家であるあたしは最近、気分が晴れずに疲れてしまつていた。夜も寝付けず、朝もだるいという感じがずっと続いている。秘書兼雑用係の片岡研三が都内の心療内科を紹介してくれ、あたしはそこに足を運んだ。そして担当医の庄島にカウンセリングしてもらつたのだが……。

*

「先生、気分が冴えないご様子ですね？」

「ええ。あたしも何か最近気分が塞ぎ込んじゃって疲れてるのよ。夜もなかなか寝付けないし、朝起きたらだるくてね」

「精神科や心療内科なら都内にいくらでもあります」

「そんなところにお世話にならないといけないのかしら？」

「いえ、そういうわけでも。単に先生のご気分が冴えないと、書ける作品も書けないと思いますし」

「そうね。一度行つてみるわ。後であたしのパソコンのアドレスにお勧めの場所の住所と電話番号書いて送つておいて」「分かりました」

*

小説家であるあたしに秘書兼雑用係として付いてくれているのは、都内の大学の芸術学部を卒業したばかりの片岡研三だ。今年の三月末にいきなり都内のあたしのオフィスに来て、雇つてもられないかどうかを懇願した青年である。一応大学の後輩ということで、面倒を見るつもりでいた。あたし自身、ノイローゼになるぐらい多数の仕事を抱え込んでいる。新聞や雑誌の連載などに加えて単行本の書き下ろしなどもしていたし、最近はケータイ小説のサイトにも自作を載せている。最初はケータイ小説をバカにしていたのが本音だ。だけどあたしの作品もとにかくアクセス数が多い。半ば天文学的数字のアクセス件数があつた。だから人気取りという意味ではモバイルでモノを書くのも悪くないと思つていて。もちろん巷にいる若手の作家たちや予備軍はケータイサイトなどを上手く使って、作品を発表し続けているようだつたが……。

*

「ウウウ」たまは募つていくばかりだった。確かに原稿をずっと書い

ていても何かしら冴えない。疲れてばかりで何かが不透明な感じがする。頭は重たいし、体も鉛が入ったみたいにきつい。ゆっくりする暇が欲しいのが現実だ。一応今抱えている分の連載原稿は書くにしても、新規でスタートする分に関しては待ったを掛けていた。これ以上仕事が増えると大変だからである。作家として陣笠の時代からずつと書き続けてきた。今雇っている片岡ぐらいの年齢から。そして筆歴が十年を越え、三十代半ばになつた頃、ようやく芥川賞を獲り、本格デビューを果たした。もちろん埋もれていた過去作はリニューアルされて書店に陳列され、幾分売れるようになる。喜ばしいことだつた。書き続けてきたことが報われたのだし……。文壇も一定の評価を付けてくれたということだ。あたしも売れない時代、相当な作品を書いてきたし、それが晴れて読者の目に留まるということは嬉しい。だけどそれと同時に疲れてきた。特にここ数年間は倦怠しきつている。まるで何かが降りかかつてくるように災難が起つた。その一つが十年以上連れ添つていた主人との離婚だつたのである。確かに子供は出来なかつたのだが、作家と編集者で結婚したということで関係者を集めて披露宴も行なつたのだし、その当時はまだお互い若かつた。今のように倦怠を覚えたことは一度たりともなかつたのが本音だ。ただ、いつしか主人も若い女性作家や女性編集者と男女の関係になり、それで気持ちが離れ、拳句離婚してしまう。まあ、仕方ないといえばそれまでだつたが……。

*

片岡がメールで送信してくれた住所をネットの検索エンジンで検索し、ちゃんと確かめてから行つた。新宿の雑居ビル内にある「新宿メンタルヘルスケアホスピタル」というところだ。受付を済ませて待合室の椅子に座つていると、

「鶴田麻美子さん」

と本名を呼ばれた。普段は作家としてペンネームの方で呼ばれるこの方が多かつたので当惑したのだが……。「はい」と返事して診察室へ入る。担当医は一人で、胸に「庄島孝夫」というネームプ

レートが付いていた。「お世話になります」と言い、一礼して室内の椅子に腰掛ける。庄島はパソコンの画面に見入りながら、「どうなさったのですか?」

と訊いてきた。いろいろと事細かく最近の体調などを話すと、庄島が手元のパソコンに次々と打ち込んでいく。電子カルテは相当普及しているようだった。あたしも行く先々の病院でこの手のカルテを目にすると。庄島はほとんどディスプレイを見ながら話し続けた。応答するようにして、感じていることや体調不良の状態を詳しく話す。そして庄島の診察が一通り終わり、

「おそらく鬱の一歩手前だったと思われます。鶴田さんもお仕事が立て込んでおられたようでお疲れだったのでしょうか。仕事量を幾分減らされることをお勧めします。あと、安定剤と寝付けない夜用の頓服の睡眠導入剤なども処方しておきますので、処方箋をお受け取りになり、ビル一階の薬局にお出しください。お大事に!」

と言つて一礼し、次の患者を呼ぶ。庄島は三十代に入ったぐらいで医師の中では若い方だ。精神科医は何かと疲れるらしい。患者の心のカラクリを見抜くのに、待合室で持つてきいた無線式のノートパソコンを立ち上げて開き、ネットに繋いでいろいろと情報を見ながら、

?やつぱし仕事のし過ぎだったのね?

と思つた。一応仕事量をセーブするため、今連載中の原稿を書き終わつたらしばらく休もうと考えている。心身ともに疲れ果てた体は休めないと持たない。しばらくは貯めていたお金で暮らすつもりである。読者には「鬱病治療中」と一言伝えてから。病院代を支払い、処方箋を受け取つてビルの一階にある調剤薬局へと向かう。さすがに溜め込んでいた精神の疲労は日々の憂鬱さを生み出す原因なのだつた。だけど庄島は「またいつでもお越しください」と言つてくれている。当分はこれで助かりそうだった。ビル一階で薬を受け取り、寒風吹き荒ぶ十月の新宿の街を歩き出す。片岡には感謝していた。こんなときに秘書から助けられるとは思つてもみなかつたの

だし……。

*

二日後の朝起き出すと、薬が十分効いているようで、起きるのに躊躇^{ためら}いはなかった。いつも変わらぬかといつぐらい、薬が効いていることが実感できている。起き出してホットコーヒーを一杯淹れ、トーストを一枚焼き、自宅マンション内を歩き回った。掃除なども済ませてしまつて、ベッドのシーツも洗濯し、室内に干して、ゆつくりと疲れた体を休める。すでに出版社にもいくらかお休みをもううことは昨日電話で伝えていた。やはり仕事量をセーブすることが必要だ。疲れているのが本音なので、自分のブログにもそのことは書き綴つていた。「今の連載が終われば、しばらくお休みします」と。どこかに行きたかったのだが、いつまた創作意欲が湧くかは分からぬ。そういう場合、いつでも仕事が出来るようにノートパソコンとプリンターも整えていた。まあ、あたし自身、大概原稿はメールに添付して送るのでプリンターはとりわけ必要なかつたのだが……。片岡はいつも午前九時になつてのオフィスがある品川のビルに来ていた。作家も個人で事務所を持つ人は結構いる。朝食を取り終わり、マイクを済ませて身支度が出来ると、午前十時前にはオフィスに出勤していた。すでに連載原稿は全て入稿済みである。当面はケータイサイトもお休みで、一日中事務所内で次の作品の企画を立てる作業に入つていた。これも仕事の一環なのだが、やつておかないと後々まずいことになる。パソコンのメモ帳に企画内容や作品タイトルなどを随时打ち込んでいく。そして作成したデータをフルシリユメモリに落とす^{だつせきやく}ということをしていた。キーを叩くことに変わりはない。単に創作という生きの苦しみからしばらく脱却するというだけで……。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8152x/>

ユウウツ

2011年10月22日16時10分発行